

# 「神岡野恵美(笑み)子大菩薩を追悼する」

鎌田 東二(東京自由大学理事長)

NPO法人東京自由大学運営委員長や「久高オデッセイ第三部 風章」制作実行委員会事務局長を務めてくれた岡野恵美さんが亡くなった。8月29日に東京自由大学で行なった「大重潤一郎監督を偲ぶ会」の最後で「久高オデッセイ第三部 風章」制作実行委員会事務局長として挨拶した2日後の8月31日に。本当に突然逝ってしまった。痛恨の極みだ。

自宅が火災で炎上。類焼を防ぐために不動明王のように消火器を持って最後の最後まで消火活動をして倒れた。最後の最後までみんなのためを思って献身的に身を挺して被害を最小限に防ぎ、他者を護った。その活動と振る舞いはいかにも岡野さんらしい。尊敬に値する自己犠牲的な行為だ。

だが、それもほどほどにして逃げてほしかった、生きていてほしかった。もう半年すれば東京自由大学のすべての活動から隠退してかけがえないご家族との親密で楽しい時間を過ごすことができたのに。それを思うと申し訳ない気持ちで一杯になる。

岡野さんと私とは、1983年、鎌倉で行なった第1回目の古事記研究会に参加してくれてからの長い長い32年に及び付き合いになる。妻以外でこれほど長く活動を共にした人はいないので本当に家族のような存在であった。姉であり叔母であり同志であり同朋であった。思想と志向と活動を共にする同志・同朋。その同志を喪った哀しみと痛みは言葉にできない。

1985年に始めた霊学自由大学、1992年に始めた天河曼陀羅実行委員会、1996年に開いた宗教を考える学校、1997年から始めて今も続いている天河護摩壇野焼き講、1998年に行なった神戸からの祈りと東京おひらきまつり。そして1998年に設立準備をして1999年2月から最初の公的な活動を始めた東京自由大学。そのすべてに中心的な一人として関わってくれた。

ご家族も同じだと思うが、岡野さんの死去を整理することはできない。不動明王のように、観音菩薩のように、常不輕菩薩のように、マリア様のように活動してくれた岡野さんの無私活動に心から尊敬の念を抱いている。

7月末、那覇の日本赤十字病院で大重潤一郎さんを見取り、偲ぶ会とお別れ会で司式し偲び言を奏上し石笛・横笛・法螺貝を奉奏した。1ヶ月後の東京自由大学主催の大重さんを偲ぶ会で口上を奏上し、岡野さんが締め挨拶してくれた。その1週間後の9月5日、岡野さんのお通夜が高野山真言宗の法式で営まれ、石笛・横笛・法螺貝を奉奏した。こんなことが起るのだ、人生には、突き詰ると、付き合いの究極は「ものがたる」(祈ること、儀礼をすることも含む)ことと「そばにいる」(死んでいても、生きていても、離れていても)ことしかない。その意味では岡野さんとはいつでもどこでも一緒に居る。9月7日の夜、夜空を見上げながら歌っていると「神岡野アーメン」という歌が飛び出してきた。

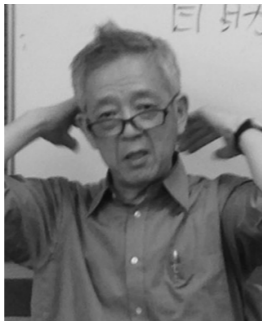
アーメン アーメン アーメン アーメン アーメン  
オー マリア オー マリア オー マリア オー マリア  
神岡野 笑みこ(恵美子)ばれ満つ うつしみの 君の面影 天翔り往く

岡野さん、ありがとう、ありがとう、ありがとう!  
また会う日まで歌い続けるよ!

## 2015年度ゼミナール報告

### 主催ゼミ 島菌ゼミ 「現代人とスピリチュアリティ」

加藤 一郎(担当・運営委員)



講師：島菌 進氏  
(宗教学者・上智大学  
グリーンケア研究所所長・  
東京大学名誉教授)

島菌ゼミは今期で10年目を迎えた。10年続いたことについて、先生にお礼を申し上げるとともに、毎年参加して下さった多くの皆さんにも感謝したい。

今年のテーマは、先生が今、最も力を注がれているグリーン・ケア、スピリチュアル・ケアをはじめとした、スピリチュアリティであった。スピリチュアリティを考えるには、新版『精神世界のゆくえ』の副題「宗教・近代(科学)・霊性(スピリチュアリティ)」の三者の関係から見るのがいいのだろう。

人間にとって、「生と死」は永遠のテーマであり、今も謎のままである。かつてそれは宗教の独壇場だったが、医学(科学)の猛烈な攻勢もあり、その地位は危うくなっている。そして、残念ながら、その医学にも限界が見え始めている。

そのため、現代人は、模索の道を、宗教・医学のまわりに広げ、時代的にも過去に遡り、探そうとしている。先生はそれを「新霊性運動・文化」と呼んできたが、今ではスピリチュアリティという名称が使われることが多いようだ。

先生はその模索の歴史を、1970年代あたりから順に、ご自分の体験も交えながら、説明して下さった。海外では「ニューエイジ」史であり、日本では「精神世界」史ともなる。宗教や医学といった権威を抑え、新しい模索が可能となった、現代の自由の素晴らしさについても考えさせられる。

第2回、第3回では、続いてスピリチュアル・ケアや宗教復興がとりあげられた。宗教の個人化が進むなか、既存宗教は模索を続けていたが、2011年に東日本大震災が発生し、それへの対応が目された。多くの宗教が心の痛みに苦しむ被災者を救うため、様々の取り組みを行ったが、それらは「宗教・宗派を超えて」という傾向を示していた。

### 事務局だより 事務局(井上喜行 渡辺恵実 宮山多可志)

長い間、事務局業務に献身的な尽力をいただいた岡野恵美子(副運営委員長)の急逝は、申すまでもなく痛恨の極みです。ご冥福をお祈りいたします。

7月に他会場をお借りしての上映会、特別講座がありました。どちらも大勢の方にご参加いただき、事務局は嬉しい悲鳴の日々でした。当日の不行き届き等ございましたら、ご容赦ください。

最近、フェイスブックを通して参加予約が入るようになりました。並行して若い参加者が増えてきたように思われます。若者の参加大歓迎です。

6月27日に2015年度の会員総会が開催されました。東京自由大学ファーストステージの活動を今年度で終了し、来年度からセカンドステージに移行する案が話し合われました。あと半年ばかりとなりました事務局も、現体制のまとめと新体制に向けて準備を整えつつあります。今後、セカンドステージの体制の充実に努めてまいります。詳細を早めにお知らせいたしたく考えております。会員の皆さまの一段のご協力、お力添えをお願い申し上げます。

### 編集後記 島鳥 美和子(運営委員長)

この夏、東京自由大学は大きなピークを迎えました。「久高オデッセイ完成上映会+シンポジウム」の熱気、「久高島夏合宿」の豊かさ、そして、かけがえない存在である大重潤一郎監督と岡野恵美子さんの旅立ち。大重監督の雄々しさと岡野さんの微笑みがこの世から消えてしまった深い喪失感。お二人に共通するのは、不器用な情熱と深い深い愛情です。それがどれほど希有なものであったのか、涙と共に実感します。歓喜と悲嘆は驚くほどに表裏一体でした。それによって私たちの心は洗われ、磨かれるのかもしれない。

NL25号に息づく言葉を、大重監督と岡野恵美子さんに捧げます。深謝合掌。

●http://jiyudaigaku.la.coccan.jp/ ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.25 2015年(平成27年)10月10日発行  
編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870  
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

# NPO法人 東京自由大学 Newsletter

2015.10.10 Vol.25

井上 喜行(運営委員)・辻 信行(運営委員)

## 「世直し講座」

### 「鳥の目コース」世界を俯瞰した視点から、世直しを考える～



4/25(土)

#### 「海の中から地球を知る～シーカヤック大航海時代」

八幡 暁(冒険家)



八幡さんは、八丈島での「すもぐり漁」からはじめ、日本、世界各地の漁法を漁師たちから学び、2002年、オーストラリアから日本列島までシーカヤック(全長5.5m)で、島づたいに、インドネシア、フィリピン、台湾……(宮古島・久米島間が最長220キロ)と現地の海と暮らす人々との生の交流をしながら、日本列島まで貴重な体験を重ねてきた。

時計、ケイタイ、コンパス、GPSなどをいっさい持たず、星、太陽、雲など古代からの漁民たちのやってきたように動き、人食い族の集落にも行った。

今は石垣島から逗子に住まいを移し、子どもたちと目黒川や鴨川をじゃぶじゃぶ歩く「じゃぶじゃぶ」活動をしているなど、未来を見据えた「世ナオリ講座」だった。(担当・井上喜行)

### 「蟻の目コース」地域に根差し、実践的な視点から世直しを考える～



5/23(土)

#### 「スローフードな食卓を～今、何をどう食べるのか?」

島村 菜津(ノンフィクション作家)



島村さんは、イタリアと日本各地で、その土地に根差した食の伝統と智慧を継承している人々、食によって地域が活性化している事例を次々と紹介した。そして意外なことに、ファーストフードを全否定する必要はないと説いた。ファーストフードもまた、食の多様性の一つであるのだと。「あれを食べるな!これも食べるな!ではなくて、例えばカップラーメンに、こだわりの農家の野菜を刻んで入れてみるだけでも変わってきますよ。」

島村さんは、食卓を中心にした相関図を描き、私たちの食卓には商店街などの地域、海山川といった自然、各地の生産者、家族などが直接的・間接的に集まっていると言う。つまり食卓を通して、遠い国の人々のことを、もしかしたら労働力を搾取されながら生産に携わっている彼らのことをも想像することが可能なのだと。

そして食事とは、動植物の命を頂くこと。宗教的なミサやお盆などの儀礼では、食が必ずセットであるように、目に見えない存在が時間と空間を超えて同席しているという感覚を持つことが、とても大切であるのだと語る。

対談の時間に鎌田理事長は、島村さんの仕事が現代における民藝運動であり、柳宗悦が長生きしていれば、きっと全国の「食」という名の民藝を採集しただろうと語った。(担当・辻信行)

5/16(土)

#### 「地球の触り方～地球感覚を活かす情報プラットフォーム形成」

竹村 真一(京都造形芸術大学教授)



▲竹村さんの著作「新炭素革命」

竹村さんの話はダイナミックだ。そして希望に満ちている。「日本で梅雨ができたのは、たった1万年前。雪国になったのは、たった8千年前。だから四季が五季になることも十分あり得るのです。」そして竹村さんは、世界中で使われている地球儀が、いまだに16世紀の信長時代と同じものであることに疑義を呈し、台風や津波の動きも分かるデジタル地球儀を操る。

東京スカイツリーが、実は洪水を防ぐために大容量(2600トン)の貯水可能なタンクを備えたウォーターツリーであることや、窓のブラインドを太陽光パネルにして効率的にエネルギーを生み出す発明が進んでいること、そして中国とEUでは風力発電が全体の30%になっており日本は立ち遅れているという話など、参加者は目が鱗が落ちるようだった。(担当・辻信行)

7/18(土)

#### 「水ネットワークとナチュラル・ステップを通した世直し実践」

草島 進一(前山形県議会議員)



草島さんは山形県鶴岡市出身。阪神淡路大震災からのボランティア、災害支援活動、市会、県議会議員活動において、判断基準をどこに置いた政治を行うか、持続可能か否か、自然資本を如何に扱うか、憲法に対してどうか、地域から流出する経済をどうするかなどパワーポイントを使って話した。「主宰の鎌田東二先生や、世直し術を日々学ばれておられる熱心な参加者の方々と水やダム、原発問題を踏まえつつディスカッション。中には山伏修行、黒川能に通われたり、岡野弘幹さんや近藤等則さんの月山奉納、京都造形芸術大のスクーリングなどで一緒にいらして、私自身も大変勉強になりました。感謝。深夜バスにて帰路」(草島さんのFBから)。

草島さんは、小国ダムと鮎問題、巨大防潮堤問題にも言及。観光立県としての構想、鮎のヤナ漁で22億円の経済効果、加茂クラゲ水族館・プラネタリウム、最近の養護老人施設での研修にも触れ、捲土重来を表明した。(担当・井上喜行)

次回予定 龍の目コース・11/28(土)「地球の声の聴き方」龍村仁 1/16(土)「音と耳の可能性」細野晴臣 早めにご予約ください。

特別企画

『久高オデッセイ第三部 風章』完成上映会&シンポジウム

「大重映画と『久高オデッセイ』が問いかけるもの」

2015年7月6日(土) 報告 鳥飼 美和子 (運営委員長)

東京自由大学副理事長、沖縄映像文化研究所の理事長・映画監督の大重潤一郎氏が2002年より12年がかりで撮影を続け、島の自然と祈りと生活を記録した映画『久高オデッセイ』の最終章の完成を記念しての上映会とシンポジウム。東京自由大学の総力を傾けて準備した催しであった。会場の両国シアターX(カイ)を補助席まで全て出し尽しても足りないくらい多くの方々参加を得て、会場は熱気に満ちた。

当日スケジュール

- 10:00 - 「久高オデッセイ第一部 結章」(2006)上映
11:30 - 「久高オデッセイ第二部 生章」(2009)上映
13:30 - 「久高オデッセイ第三部 風章」(2015)上映
15:45 - シンポジウム
「大重映画と『久高オデッセイ』が問いかけるもの」

シンポジウムで語られたこと (シンポジウムは、沖縄の大重監督とスカイプでつないだ状況で行われた。)

まず、『久高オデッセイ第三部』の制作実行委員会副委員長でもある島藺進氏は、若い神女の涙やウミガメの産卵、新しいいのちの誕生と成長の姿など、自然そのものが神であり、それを受けて生きる人間の姿が見事に現われて、地下水脈のように続きよみがえるものを描いていると讃えた。戦後70年、イザイホーが無くなって36年、大重監督が久高オデッセイに取り組んで12年の今年、この映画が完成したことは、沖縄を通して日本人の心を改めて考え直す契機となると語った。

続いて映画の音楽を担当した新実徳英氏が、その作曲の秘密を明かした。以前から沖縄が大好きであったという新実氏は、日本の古い音階は「レ」が基本の七音階(いちこつ)音階であり、その「レ」を中心にして、琉球旋法を生かした変奏型を展開していったことを小さな鍵盤楽器を使って具体的に演奏しつつ解き明かした。そしてこの制作のはじめに音のない映像の素材を見たとき、そこに現在の日本において、沖縄が沖縄を取り戻さねばならないというテーマ、そこに生きる日本人の良さ、優しさ、霊性が宿っていることを感じ、音楽でそれを支えようと作曲したことを語った。

カメラマンの堀田泰寛氏は、1969年の大重監督との出会い、黒木和雄監督が大重監督の処女作『黒神』を観て、10年早い傑作であると評したこと、大島渚監督との深い交流などの映画好きには胸躍るエピソードや、大重監督が人付き合いにおいて、いかに熱い人であったかを披露した。堀田氏と大重監督との45年にわたる映画人生の旅で、「光りの島」の撮影がエピソードであり、大重監督のテーマである自然、いのち、霊性を映像として見せること、感覚を研ぎ澄まし、目に見えないものを奥行きのある見える映像として撮るといった課題に挑んだことを語った。

阿部珠理氏は、大重監督は病になり命を削って映画をつくったので



パネリスト

- 島藺 進 (東京大学名誉教授・上智大学グリーンケア研究所所長・宗教学)
新実 徳英 (音楽家・作曲家・桐朋学園大学院大学教授・『久高オデッセイ第三部 風章』作曲・音楽)
堀田 泰寛 (映画カメラマン『久高オデッセイ第三部 風章』撮影)
阿部 珠理 (立教大学教授・アメリカ先住民研究)
宮内 勝典 (作家、大重潤一郎とは高校時代からの親友)
司会: 鎌田 東二 (NPO法人東京自由大学理事長、京都大学こころの未来研究センター教授)

はなく、久高島からいのちを吹き込まれて作品をつくったのだ、そして最終章は多くの人々の力の結集によって完成したのだと語った。久高島はイザイホーの祭りがなければ意味がなかったが、大重監督は重要なのは日々の祈り、継承される信仰、忘れないこと、いのちの再生産をみつめて三部作をつくった。ラコタ・スー族の儀式サンダンスが100年後に復活した例も挙げた。久高島には日々の祈りと共同体、魂と物の両面の継承があり、閉じていながら開いているという「島」の特性、現在は新しい血を受け入れるということ、そこから久高の未来が展望しうることを指摘した。

宮内勝典氏は高校時代に、大重監督の短歌が悠然とした風格があるのに注目して、文芸部にスカウトしたこと、大島渚監督の最後のメッセージとして有名になった「深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない」と言う言葉は、ハンセン氏病の歌人・明石海人の言葉であり、高校時代の文芸部は「深海魚族」であったこと、映画の魅力を教えたのは自分であることなどを語った。カチャーシーの寿ぎ、喜びと、若い神女(カミンチュ)の涙、21世紀に島で静かに生きることそれ自体がたたかいであると示唆した。

それを受けてスカイプで繋がった大重監督の姿が映し出され、病床で

沖縄映像研究所の次世代からのメッセージ



「助監督として」 「久高オデッセイ第三部風章」助監督 比嘉 真人

私は約2年半の間、大重潤一郎監督の遺作となった『久高オデッセイ第三部風章』の助監督を務めました。大重監督が脳出血による半身まひと高次脳記憶障害、末期がんを抱えていたため、私の務めの半分はスクリーンの外での介助であったように思います。

監督は「映画が先か、命が先か」と、自らの命が尽きるまでに何とか映画を完成させなくてはならないというただならぬプレッシャーを抱えていました。しかし、映画作りによって新たな希望を見出し、そこから生命の糧を得ていたのも事実でした。

監督は映画と生命を混同したが、または知らずと表裏一体としていったのか、いつしか大重潤一郎は波となり、風となり、島の人となってカチャーシーを踊っている。そしてウミガメとなって産卵し海へ帰れば、若き神女となってティルルを唄う。また朽ち果てた老木になって体内から新芽を吹く。最後に島そのものになって、ニライカナイはここにあったと語る頃、彼の魂は天上へとシフトしていた。

大自然、死と再生、魂の不滅……。このような映画監督が生命をかけて織り込んだ、入魂の作品に助監督として関わることができた事を誇りに思います。

「出会いからの13年間」 久高オデッセイ第二部・第三部 演出助手 高橋 あい

大重監督と出会ったのは2002年、まさに12年かけて記録する『久高オデッセイ』の準備にあたるような時期でした。2004年に脳梗塞で倒れ、音信不通となる時期もありましたが、出会ってから今日までの時間はとても貴重な時間でした。

2012年『久高オデッセイ第三部』の撮影が始まる頃、アメリカに留学中だった私は、スカイプでほぼ毎日会話する日々。監督を励ますつもりでかけるものの、姿言葉に励まされてきました。身体がしんどい日はほとんど話せず、それでも二ヶ月に一度はインタビューの日を決め、進行状況の聞き取りをしてきました。監督の思想はぶれず、其の頃話していたことが見事に『久高オデッセイ第三部』として出来上がったように思います。(インタビュー記事はホームページで読むことが出来ます。http://freegreen.jimdo.com/)

大重監督が肝臓と脳梗塞を煩い、身体障害者として制作する過程で、身近な家族やスタッフの苦勞は計り知れない時間でした。けれど、監督の病氣故で集まり協力し合った人の集積と時間でもありました。『久高オデッセイ』は、誰が抜けても完成しなかった、大重監督の人持ちの現れでもありました。痛みとともに頑張ってきた大重監督の精神と身体に感謝をしたいと思います。今こそ、大重監督の映画が多くの人に届く時期だと確信しています。



「上映会当日のメッセージ」 □□□□□□□□ 山田 宏道



監督の息子さんが僕の一才上ということで中心スタッフが親子関係。親の想いを子は継げるのか? という葛藤の中、家族で制作するような映画でした。

この環境下で家族スタッフから沢山の学びがありました。助監督のマーティからは、忍耐強さ。監督の介護をしながら映画を撮る姿、男らしかった。あいさんからは女性の強さ。仕事の鬼でして、僕は普段キャンノンで働いているんですけども、会社以上の厳しさが……。

世代が変わって鎌田さん。信頼を持って資金を集める。この一番責任の重い仕事の後ろ姿は現実社会と向き合うことでしか、世の中は変わらないという厳しいつけでした。

監督は真逆で夢を実現するためには「ただ信念を費くこと」。入院中タバコすつちやダメだっていても吸って(苦笑)でも自分の信念を保つことでここまで長生きし、現にそうしてこの上映の日を迎え、夢を実現させています。最後は一番影響を受けた尊敬するスタッフである岡野恵美子さんです!

岡野さんからは愛を教わりました。夢を実現するのは愛。スタッフ全員を包む愛が映画を完成へと導きました。すみません岡野さん立ってください。どこにいますか? みなさんどうか拍手をお願いします。

声が聞き取りにくいながら、それぞれのコメントに御礼をのべた。徐々に調子が上がってきて、長年の相棒の堀田カメラマンには「ホッタタイカン、あいかわらずしゃべりすぎ」などと突っ込みをいれて会場を湧かせた。

ゼロの中こそ豊かである、人と自然の無言の、魂のコミュニケーションを続けること、それを今の若い人は待っているのではないかと語り終えて、プカリと煙草をふかし、大重監督の自ら燃え続けた人生の最後の姿を観客の脳裏に焼き付けた。

続いて久高オデッセイ制作に多大な協力をしてくださった戸田日晨氏(遠寿院住職)、近藤高弘氏(造形作家・陶芸家)、佐久間庸和氏(株式会社サンレー代表取締役)、松田妙子氏(世界救世教鎌倉教会)に、会場からコメントを頂いた。

この映画が誕生するまでに多くの方々から力を頂いた。そのなかでも若い世代が大重監督と共にこの映画を生み出した。病床の大重監督を支え、共に映画を生み出した沖縄映像文化研究所の次世代を担う比嘉真人氏、高橋あい氏、山田宏道氏の3名からのメッセージでは、病を負いつつ生きて創造するプロセスが如何に人を深い境地に誘うか、それぞれの立場から語られた。

最後に久高オデッセイの制作者である鎌田東二理事長が、この映画が、人々の日常の立ち居振る舞いにすでに祈りがあること、海の呼吸、自然のエロスの映像そのもので語る叙事詩(オデッセイ)であり、虚飾や説教を排し、素朴でありつつ堂々たる名作であること、大重映画の集大成であり21世紀にこそみられるべきものと語り、参加された全ての方々に感謝を述べて終了となった。





